

2016年度は、前年度と同様の体制で、各科医師が分担して脳疾患の診療を行った(外科2名、消化器内科2名、循環器内科2名、腎臓内科1名の計7名)。外来は、脳神経外科(藤岡)が週2回担当した。

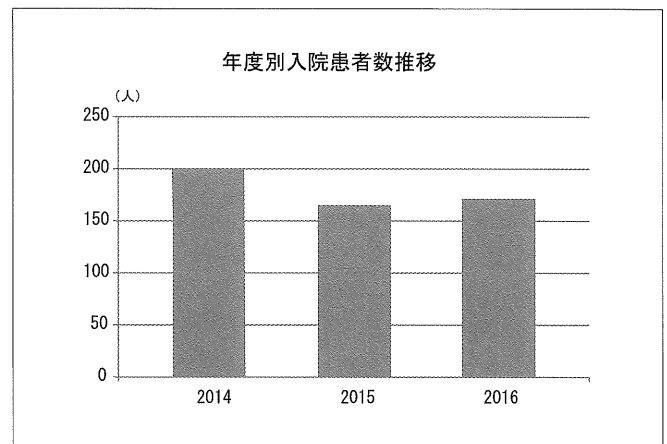
入院については、脳・神経疾患患者数は172例であった(図1)。内訳は脳血管障害(脳梗塞・T I A、脳出血、くも膜下出血)111例(64.5%)、頭部外傷関連(外傷性くも膜下出血、外傷性脳出血、急性硬膜下血腫、慢性硬膜下血腫、脳挫傷)17例(9.9%)、めまい19例(11.0%)、てんかん・症候性てんかん7例(4.1%)、脳腫瘍3例(1.7%)、その他(パーキンソン病、アルツハイマー型認知症、正常圧水頭症、ミオクローヌス、多発脳神経炎、末梢神経障害、頸髄症・胸髄症、低酸素脳症、筋緊張性ジストロフィー、肋間神経痛)16例(9.3%)であった(図2)。なお、脳血管障害には、リハビリ目的での転院も含まれる。前年度の165例と比較し、全体として患者数はやや増加、脳血管障害とその他疾患の比率には大きな変化はなかった。脳血管障害の内訳は、脳梗塞・T I Aが72例で全体の6割以上、脳出血が33例で3割程度であった。前年度同様、天草地域からの回復期脳卒中患者の転院受け入れ、あるいは脳卒中発症後1週間程度の急性期段階での転院受け入れなどを積極的に行った。

外来については、脳神経外科の延外来患者数は2,336例で、前年度の2,443例より100例弱の減少となった(図3)。各月の患者数について特に一定の傾向はないが、4~6月の減少については震災の影響が大きかったのではないと思われる。疾患の内訳は例年同様、脳血管障害、パーキンソン病などが多数を占めた。

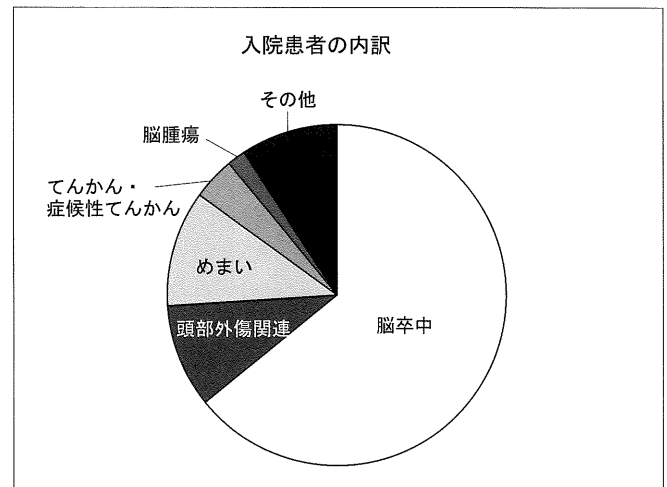
当院診療圏の三角・大矢野地域は高齢化と同時に人口減少が顕著である。にもかかわらず外来患者数、入院患者数ともに大幅な減少がみられていないということは、現時点では脳卒中やその他の神経疾患について常に一定数の需要が存在しているということであろう。

今後も、脳疾患専門医を中心とした専門的診察・治療、質量ともに充実したリハビリテーション、MSWや看護師による手厚い退院支援など、当院の特色である多職種協働診療を活かして、さらなる診療体制の充実を図っていきたい。

(図1)



(図2)



(図3)

